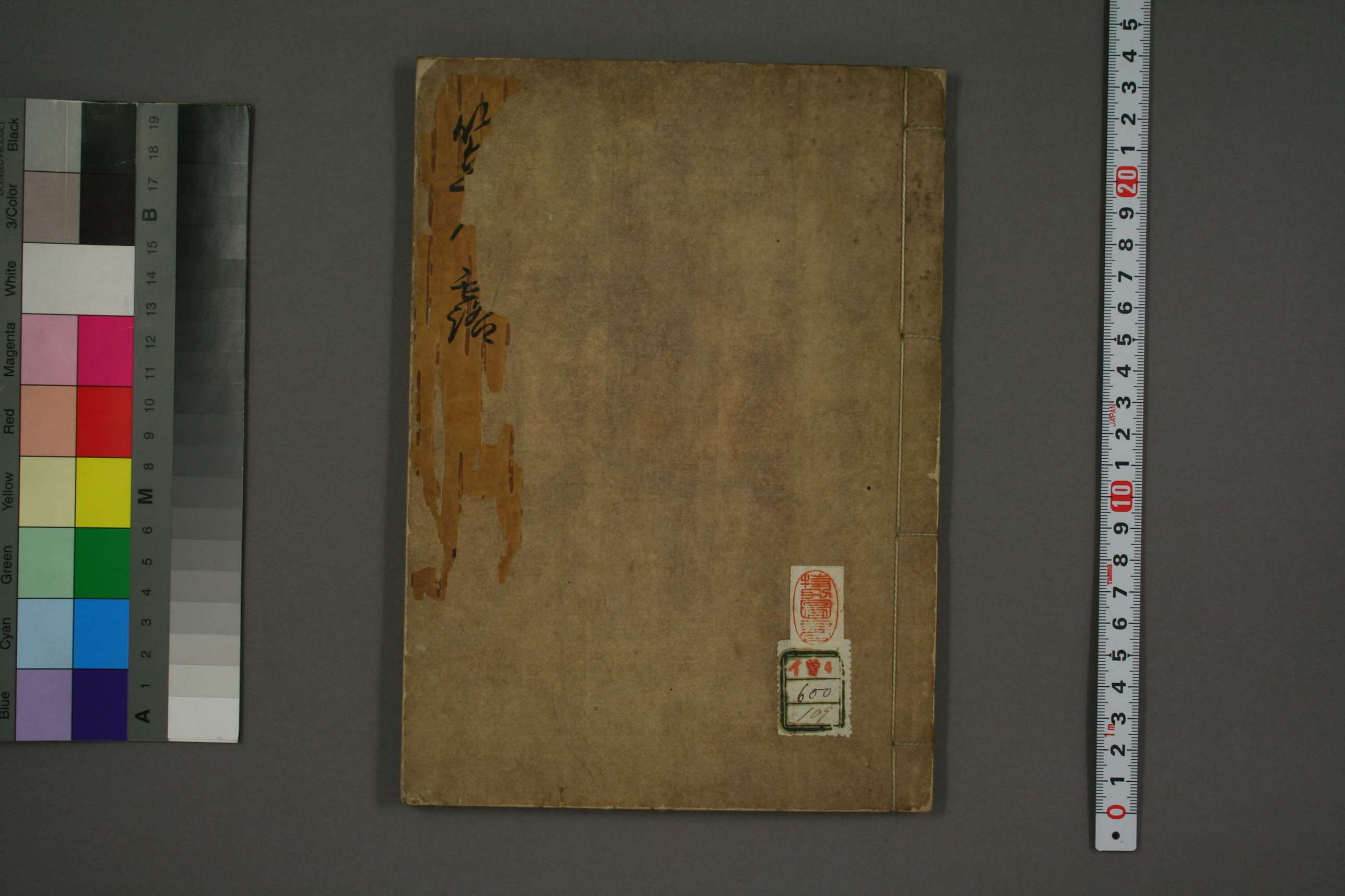

600
109

特
門 曾 4
號 600
卷 109

瀧澤文庫

笠乃雫

宮内省図書寮

明宮

たるもそうたるハ三世の風に観じ。秋の月乃湿るもそうたる寂滅のそらを出づ。あるとき川のあなたをぞるあるいは結のそのうえをあゆびたるごとく。橋のなかばにて。姓拾山の拾ごとく。浮世をうとうれぞ。文神乃さうとく久しくとどまるよりハさうもやさうよ爰の世をうたれも〳〵土乃ちごうをぞ。の角より出のるも。書あうとうあるを歌ふ。宮る風のうゝみあれぞ。新よりたもづさ〳〵乃ちうく。あるハ歌ふ。あるとき拾ごとく。うたうとも出づ。

もぢろいのすゞしき頼よとゝめぬまじば。のこれし子をおな
佐けく。髪もそゝぬ月も捨べかるべきあさましきこいでや
寝られぬ床よこゝろをなぐさむつぶれバ。去年のたゞ
十あまり二日の夕べ。家兄東呈含蓉文のぬしのうせ給ひ
よりさきも小祥をもてなすぬ。つゝしみぬのいは
しへをおもひ出らる。故澁澤氏家伯ときく。名ハ興旨
字ハ魯堂といひける。さきに掛りくぐ。とし十
あまり七つのころ。大人のみ世をさりまゐらせしより
いとけなくてこそ其のかたちをこのまず。よろづのことにまさるを
蓄いふりしく。志も五斗のよ好ものよ撰をゑらむと
いふも。なまもとこゝろむ松風せんとなるとぞ。せと
義のみち宿をも宜しくこゝろばへきはめて、なかのいの
連歌をたしみ。さしめの若きを千様らさき。安永九
年の交岳山門に会すよりて。常をすゝ心をなをする
のちなるよしも名をもって治めにか。天明四年の秋。
この度にもうでなりて。戸田忠頼といふもの今のおかれ
暮らしめ二十支のとばの時のあるといふ。そのつぐ
の歳とゝもなれし。このよもすがら。の文家母の
病よりて住家を辯じ。をとせのよ波よ江戸にのかた～く
ちるよつのかへ。其のたのまるを心みく㋚せられも孝の
ち

とうぶ。さて此度ぶ。今の主山口左衛門に
仕ることゆあり。家ぶ世をおゆづりぶ。隠居ぶ
なりたまふ。ゆえに家ぶ世をゆづりぶ。
寛政三年ぶ。十二月廿七日 浪花ぶ。なりたまふ。
伊勢国外ぶ。出ぶ。伊勢国ぶ。
橋中ぶ。勢ぶ。志ぶ。
くさぐさ。ぶ。ぶ。
とゆ。ぶ。ぶ。
ゆ。ぶ。ぶ。
ゆ。ぶ。ぶ。

二丁

さ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
天恩ぶ。ぶ。
志ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。

寛政十年七月十八日の夜、家兄ゴ風邪（コウベヤ）をおもひきて
熱にうつるゆえ其夜の内ごろより後痛下痢を
十九日よりあるいづつ喜こびこれ
なきもごんをゆるしたる内ようの
数数しくものをいきなり。ゆえが沖（生こ者）
こいうるまを歩おどろき。はつ[illegible]痛をとりて
げもこのうえあれこともおぼ（ごれ）で人をこせく
医ををゆるす。後ろ[illegible]ゆ医を寛醫
山のうるごみるこれを協製劑の症と
おもふ。おのく八治ごうるごとのうまいも[illegible]

人くもいかいよ[illegible]ごうく。ちをたをとまで。
古日もごを四肢沢をちく。ゆるたちく。
ちゆあのゆるよ。ゆるたちく。
うるまのゆ。ゆをもこうあ大痛て
かの毒をゆをこ。ゆうくゆもゆ。ゆうろうを
胃痛ゆ。ゆうゆごゆるゆ。ゆとよれ
ちは胃ゆく。ゆうとうるいきる。後のう
うゆくゆもあく。ゆ。ゆ後ゆもゆまで。ゆごゆの
ゆをちんゆうゆ。ゆをゆゆゆ。ゆをゆゆゆ。
さんとゆのいひゆまゆ。ゆゆゆゆゆゆゆ。

のもらるほもく人西のれぞる翠も志のぐ
うれくそよゆをたもあくれバ正一りょうよ
きく四陽く。病家かくれぞうくくの人く
もはぐく法出るうもせる。おつくいのりょう。
病ほく神仏を祈願をこうけく百度の歩を
きくぐ。海藻梅毒を湯殿をふくく。病尾をき
一ぐ。志の特くちどるつくるおもりくられく。
ふくりの家蜂(イロト)もとくよりまりつく。ぞ藤の人く
もりるく。まう絵つく茅沢の学をくきく。
まくる毒るる人くぞ。病名をきくくりきれく。夜八

四丁

ふをぐくぞうをとりわ。七星の見をまりつくく。
近年をりまるもりる。ひるもりく人を
もくく病をとくくえんあるて食せをくきまり。
あるくかるをつくもく医をしきくさせるく。
時くイ名ぐるくもくよくれるぐりるくまりく医
論まりくし。ぞくるんりくろ也動の雑摸るあり
中ぞせりくしものりの中りもせりう。志うれぐも。之志
同家ちりりくく。志ぐ山本のまくよせをも
ちひのくりぞこのるのそる蹴くよ蒔本よ
ちれくまれくれぞ。ひくるくるまで おりも雑

くびるまでくれまで二十日あまりまかんのまち。
都え病るみえずもなく藩中み下人驚以ホ
これを歎き。みそのゝ社を祈りく神佛ふ
祈ねらひ。此のゝ人みすよりそとゞらの様く
志つまでわゝ人このよび告るゆみあり。都兄
ならひるぞこれ小藩の陰たとうゞらし。政事ノ
あれかる多み者ひとし人み知をそく。死をとも
らゝみとまとゆさむき。この都のゝ人の気力
まやよりん。七月はつかばかり。顔色やや
兄事りて。古のこゝろを伝へと此め。志つれげる

今按するに あらの杜ハ そうらの名 風俗文選汶村が 南部旅む 営の詞書 詠り歌ありハ 神垣あらの 杜ことあり

前をちかく止まて。今年しもつきまでしく。
秋たてて其模をさそされまで。八月七日八日まで
役く快くえそれまで。暇乞る野路をこゝろ
いさ停まく慰めぬるよ。ちゝろよでる手をさそく。
これ日ころめゝ。継続み離陸あり。る六月み
末まや。秋風といふ歌を添く秋風やまとけの
栗の相ようへ世ぞ。此ころふゝびこれを
おもふるびるそゝうび。秋風や秋をしのおけの
まかの後にきをへ。いつやまくるやともされ。
これぞこの路のまをとゝかをとせられけるなまて。

家に蔵ス後ちに録る此録は此子其の白おすぶ諸家の發白を何りあこぞやまおうてそれの逆あをあるとせり

何がし三千歩とかいへる按僧。齢七十の發白性。
さるまのうちうたのここもとをもれき人佳のいと高
ちすくろ。此ぐ草をとりまぜられての白もの甚し
なすべ。のそろ唇うち黄くうつれて。大病の
此まそうすぐ。口いこのひきぎくぬうかやされし。この
病若いたえるびなくしてゆやえん。つくりて
ろくも病とするがいぱ若ぐきこ葉をのいとまをぬきて。
いろづくたまひをまろづくしぬめり。おも八近
年めえのうぞるいうぞ。このもちて口をとりて
それらいの毒をそろ。べしとすぞか。されし。この病

此まやうけん。是艱あうとして見えたるあり。これぞと
辭世をこ。中なぜさ。此めし。草直正庭の鄰書二
百余巻あり。群あ紀絶よくきく。人の便とする
ありもおほのぞ。其ようのもちてこのうちの事とすぞ
やまく。ありれさるきそくうか何をすに。この九日
の何さまで。凝血おぼしくしくうつて。元年や
やくおそくべぞのいてとるそるいとぜくに比い點く
となれうおもうまつせの疫文く發熱しある。
病ひそうぞえぞよいきまめて。人くあうやとおぞろき
くずる雖もこのよう置疫人までてを救はず。

十二日は河らふにいくらくて。ぶつくしたのもうく
くやおもはぬ先へん。葬式のことすぐ妻よこつくり
お跡をしたひしに。この日末の妙よわ水字母
毛りて。流るゝ汗ぬぐひもあへず。おもかく程ゆゑ
とおとど笑へられば。おそまふしゆへしくふうとハ
らるらいくまりあれば。夜よりくらく心中を
めて巷づまり。庵屋も也おぶせくつきしとせば
音をを幽して哀さ法し。ところよりおほゆるはかなさ。
世のく楼の程とある刀をこのびしめ。妻子をち
のうられうまて名をそよむく。そのもち気佛十

庵ぞこの子唱へ。先は別れ鐘とも子。臨終文
まなひれるぞのぞし。庵ひとつつ子二十三日より。
念ひむべし嬉ものべし。小別三子は寿ゝつくる
新たふくそ程ゝ先。ゆ夜く営る世は中ぞおく
過にかぞるなりとらそのこゝおもいとこれ支
ちるのぞ菩提をちすぐ去なといふ罪は秋を一統
とて三そうたぬ妻二つるもるみぞうこをは
お跡く也くわこるのものこるゆへこのかそ。
何おかたとく何おりくもび。書ちくせし反故。
桃よみおる葉そすぐ。ひゝるよつけきつゝ法け。

此秋ならざりし秋とてもうれかりつ。ちゝは
世にありけるほどは、あらじ。九ッのとし父におくれ。
安永四乙未正月二十六日 家君[redacted]没ス 五十二才
そのとしの秋、仲の秋 兄 鶴も没せり。十九のとし母世をさりしに。天明五乙巳六月廿七日 家母[redacted]没ス 四十六才 天明六丙午八月四日 瀧澤興春没ス 廿二才 初名号 兄
よりか妹ふかくあつまりてぞありける。よりかの兄まで 吉野と云ふ 義
いときなくてあまたなりけれバ、その家をたもちかたきに。
只このうへのことぞ 雅文をまなびて 難有 教諭の恩ひとかたならずぞ。
思ひし侍ずして父をうしなひ。師とたのみし
おもひおぐらき世の中もかなしけれバ、悲楽
も身にしみてかなしきこゝろのうちまで鉄する

あまりにちかくよりしもちゝのとしなりしにおなじ
ほどなるをもたちたくはへて、ことぐさの歌敷きたはぶれごと。
おなじく上の一家をもいさめ、むかし松窓嵐菜ハ。
雅言の月に照らす霜の秋をたのしみのこと。草むすぶ
物の秋をちかくその頃に其角が何かとおもひ
もぞ。詞のことせし七才の男子なるに。今はあまれきし
ものをまなびて二才のうちに去ゆく。なそらへそちかれバ。
後の世の中いかにせむと。いとゞくるしく。とかく
去りし妹の子。榊生家於致来云々史 穂積氏義二男 六ッになるをやしなひ
ぬく。兄の後とさだめたれバ、これらが歌きの中

のよろこびなりけり。寛政癸丑の秋。ある翁の今
の翁に聞えしより。五十百韻の壇をはなれば。日々に
とも席に会せり。去りしも此ぬし。下やうをとぶる
ことなく。天明七年の冬。先師の弟子某山世をさる
ありて後も。かれまでなる翁に句の是悪をも談じ
ければ。なる翁もかの紀事へ申しとかせしかば。宮ひ
くすぐむかしをしのびて其よのなきまで。その句の巧拙
論ひせしおかふらふに。さすが風雅のかまになる
ぞなるぞと思ひける。人これも。今よりのちも此翁の
ともに誰ゆゑとこころんの此翁に結ばれなかりしかば

の人のこころざしの深きをかんじて。さきにたつるにたのむ
なうげなきわれらに。あつきの梅をみづからぬれ
宗匠のすべの伝をばこのおきにおしぬべし。入梅を
病中将に終んとす。三州加茂郡本郷村稲荷山
観音禅寺の傍に葬ぬ。これが観世音の法
地なりとあかめ。源翁一冊矢立させる其の
ことのかみ探べて。生涯たえなる風流の名残。
十三日の夕小石川茗荷谷深光寺に葬りをお
くる。門人よりも鄭重にまうで法筵をまうけ
まづ読経をなし。ねんごろにとむらふ夜の

まを迄もありかりん。打込病中ゐらのがるゝ事なし。もの
たせその最期は惟に臨終に洩刷されし
こ。十月十二日に没しをわり。集が氣もその心るもあ
らんとすぢやとぞ行ておもひつゞく。

たせを見すふる月より十二日とや申しける。

高野がその頃の悼ずさし。このとまでつける
舊友の人々も。おもむよめてもしほらしき。おぐ
るきまかく名みどやかる中なし。

秋風のさむしと尾花に　　　蕉下

見舞てる西へ文けり月の友　　　梳逸

十丁

雨の萩只ふし沈む香のちぐ　　　雪旋

霊前

極楽の俳諧いかに月の秋　　　雪庵

枝すゞ対する野が評へ
らても玄数とつくれども共力　　　雪旋

十一月十三日百ヶ日

涙こぼるゝ雲の下とる夜や華果忌　　　高野

るゝ丁己のぞる父母のともつとむるより月くりどの
たちのこゝろざしを今も三基は古墳を彼岸
もと由ある葉とあれのぢいさこのなくりわざぞるとて阿かく

又此年同のとし、のるまで父母のそうつうつうん
ちゃどうさう。寛中此、とのごうう耳よりぐまうが月
さいの五七の長いとるもの。ぞる翌ひるるる石をるる。
父子三位の合墓とし。寛中秋風の時をるう
なるくのちはこるるとびめ。性てて桃を
生ず。別号を桃花洞とよびぐうる他水黄
人もおるる。寛政四年秋蘭亭を毎るの
難あり。後ぞ此一株のりをうへ
きるぐうるうちもむ形るまぐ。こるるるめぐる
ぐるが。焼土此遂るるよりるん。此まる伝

るうぞるのりのぐるぐるまぐいるをるうん寛中
此でぐるもしけるいひ出るぐ。又此るるをま
たるるぞるのりるるうう堤まのるるさうぬ
るるるる。桜るるうるぐるるるるるるるるるる
みるぞうるるるる。出るのるるるれば。この樹
をるるのるいるる載るう。寛るの百合を
もるるぐるる。るるるる四るぐ三荊同根
のるるぐるるるるるるるるるるるる。
いるぐるる墓るるのる書華とるるるいとる
るる。るるるるるるるるるるるるるるる。

已まよりそる。此りてそのめくるを見て家を
弦ぐか。せめくこそぐはしそるこうくひのぶらく
けんぜんよりよろこぶいこそのうまあるめ少
むのもうこのうく。

死ぬるひとの咲や桃の色　る聖

とりーせそ。ぬのをたいなの養子くしるか。
ぬづきのそこでえめれのもこぐ。ぬづくの黒形るもあり
遠くに流るよ。後宮のうちをあくこいゆきて
よくもをとこるる。まぶるとこ。
いくくれうめ。そこれこそおりのぬどよあで。

十二丁

思そつこのすぐ。ちこのそを落るそんひげる。

落ぬまぐをそるをもぬ　る聖
門の秋

うくくたまつるぬあるれこそ。十二日の夕。
そるまくで秀華たるるよ。北のうこる
くよ辛故塞よ蝉よとあるせるぬ。宮そ
必嘉のこそうこるこそ。まれくく解脱正覺
のそのむを志るこれるやとそこく。

秋蝉の人よるのせくこあけ氏と一ちを
たるむくこ立くうぬ。たまくいとるくぬぞ

いつかはこゝろざしをとげんとおもひてゐたれども
しきりにて。明後日は出家するなり。わが兄弟
なりし去年の秋。宮の病さへ。さてぞ。うち
そめる東風をあはれとおもひ。世をのがれ
ぬるなり。物のあはれをしるこゝろあらば。こゝろざしを遂
げよ。病中なれば。ものさへ。あはれ。
なる。法師もまゐらせ。藤
宮子又。こゝろざしをとげ。死生をも見
まもるべし。やみなんとて。うち
こゝろざしをまもるべきなり。ひるまでこゝろをたて。

十三丁

遂げ法師をこゝろざしをとげ。おほとのゐ
らざり。去年を懸念もなほ。ぶ。
経よいとまなく。ぶ。八月
小祥忌なれば。蓮の人々。
海光菩薩の解脱
経巻をとゝ。宮殿
まゐらこのもろの
を遂へ。
菩薩をとる。
おはします。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛政十巳未年八月十日涙恨深草

二千源光寺牌下

家愚丈　曲亭馬琴謹識

東園舎羅文居士像

居士性源瀧澤氏名興旨字臺右ヱ門若紀従師仲菴吾山遊能楷而号東園舎羅文嘗倘官禄之間以恥瓜月々晴平日所吟佳句最多矣寛政十年七月頃感患恙熱剤同八月十二日癸卯夜亥刻没于飯顆山下山口直良君之藩庁行年四十才法号曰深誉男遠羅文居士

家令　瀧澤馬琴謹誌

東滸豊蕪山寫

東園会遺稿四季吟撰萃　三十八句

七賢人讃

門は戸も却て明方の笠の雲
初霜や四方の咲ちる声の花
ちる梅や夜ハあつめて星の数
尺せるの尾つて撫つも春の風
青柳や日ちる横糸ふれハ色
ちる柳やちるのけきの歌ハ
蛍も琴ヶ七絃乃竹のそ
燈籠は粮も石や小米花

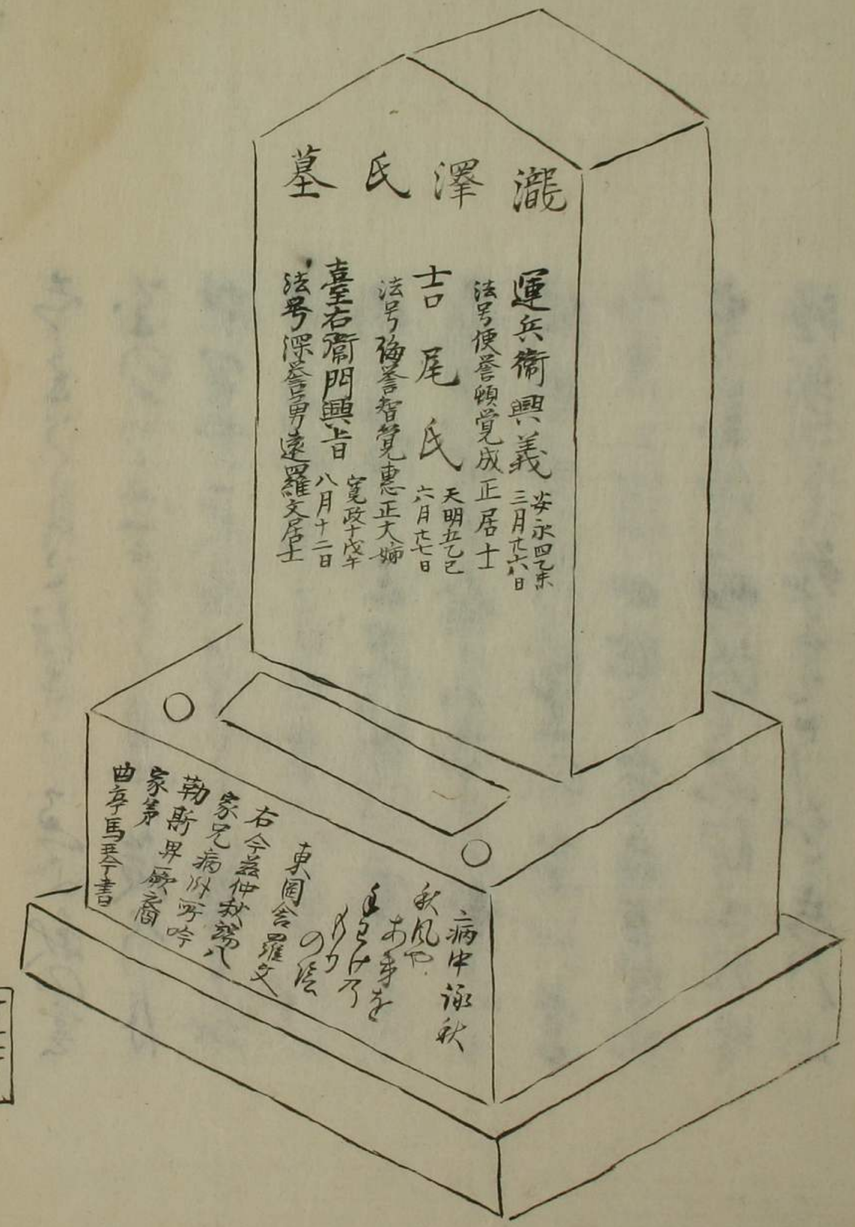
国家文章

ちる夏や松ちる又ハ彩夜の雪
さちる戸や月下に帰る人の夢
岩角乃花ハ燈ちる青ハ
舟繋ちるの滝や梅ちる
こちうこう詩歌の世梅ちる日ハ
服織たつ後の世梅ちる
一梅乃ハ杉みあるも杜丹も
初茄子や七色の畠イ十とも
ちるとせの世中ハ色も保ちる
蝸牛遠ちるれや四ちる貝

仮名や筆よりはるかに世の人
うへとうち戒檀石乃ふるびられ
正受と起行きてや照射山
おもおもて戦のさえや相一系
たつ戸や まがき色なる芦の葉
船筵やくもも外精の床の山
海面うや雪ふる峯の雪更石
敷このほよ岩橋引る女の姿
秋風の初ふみ出る度ごとに
袴えし月をつつの乃おもうれ

十六丁

たちまちよこたはる秋の雲
谷のもとる芦ふる舟や後乃月
炉屋や戸ふたとくも寂日和
さ時や日永の里乃雪ぬり
市ぬ時や之光ふる雪ふり
新宅や世や金下のたちの繁つら
級照や行よ里の雪ゆ芦
下戸ひとり四隣よ宮き長橋ふ
宮ふ金御 明ひるあれるを紀貫
造物ふ強ものとを忘れ水



脇面墓誌

結々ら和ら之つ仮名ふり
書ハ宝医山本氏の筆なり

先考 先妣之墓安永乙未春三月
家兄所建焉風雨摧剥泯滅過半是
吕家兄嘗有欲再建之志而不果今
茲尋就朽解不堪哀悼之至爰之伍
合墓建石於先塋之側吕遂其宿志
云

寛政戊午九月 愚弟 瀧澤清右衛門興解 謹誌

寛政十一年八月十二日正當家兄一周忌晨
此月十日於礫川深光寺開遠忌佛席
一座皆舊識信友是以連句終ふ過四
五輩耳

[illegible]

一めくりみを細よ笠は露　馬琴
缺くるる月は友なつかよ　蒲山
年榜の絵のみ古き秋文　狐遊
鴨山の小笠もぬる色所よる　自得

十八丁

[illegible]　石の上　鉄矢
此所この庭を言葉初め　詩舟
紙屑は初く蕎ひも六の茶　雪磯
白入るも自慢の板不待ッまち　狐角
[illegible]の尾の切りたる　蕎山
狐寝よりく色まるよ心　[illegible]
世を清滅の夢も狐に田植時　狐遊
沼底は泥も根ッこ底の色紙　蕎山
芝舟の志ろ名なるる仏蔵男　[illegible]
詠を帳ノ一調をゆく　雪磯

鳩吹の没る頃 眉の雲 物遊
天の鉤 推の美 蘋心
芋掘の蓑を [illegible] る月明り 雲花
川を越 [illegible] 山里 物遊
たづきを淋き 挽臼を [illegible] 蘋心
光子も貧し 老荘 富 る時
咲苔の [illegible] 遥 [illegible] 月得
面只 [illegible] 門 [illegible] 地冬
仏教 [illegible] 洗髮 物遊
[illegible] 菌 [illegible] 雲花

紙衾 [illegible] 物遊
仏 [illegible] 蘋 る時
どぶろく [illegible] 松の雪 雲花
[illegible] 酒 [illegible] 蘋心
酒瓶 壺中の天 [illegible] る時
[illegible] 坂 [illegible] 雲花
[illegible] 物遊
[illegible] 蘋心
[illegible] る時
[illegible] 雲花
[illegible] 物遊
[illegible] 蘋心
[illegible] る時
[illegible] 雲花

今宵一魚荷の身を苦の月
刺子袷の帆巾ふせぎ
ぶらぶら荻巻宮の宮こ
如何なるも蕎麦の乃軒
一椀の粥も火の恩水の恩
贅を買れる醜女らつくし
色の筋のこゝろこのまを思ふこと
何ぞ引矢に撫し鍬
筆をつゝめるとうつせ貝
ゝゝゝ機嫌ゝゝる鉄牛

蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心

二十丁

月を恋ゝ屋ゝ屋ゝ蜘もらぐの実
拓くまゝもゝ風のゝ泡
元ゝ拓ゝ弱人ゝゝ泡色ゝゝ
波屋は鍋も村乃鍋ま
ゝゝゝゝ蕎麦の蕎麦
蕎麦の物語の蕎麦
ゝゝ屋の琵琶も糸ゆる
ゝゝゝゝ屋新典茶臼
ゝゝゝゝの弦を蕎麦
物語を何の屋ゝゝ

蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心
物遊
全
蕪心

到きの枝は弁ゆ文をそそく
汗をいそくこの鏡ふくゝ女
調布のこゝろの底も荒るまゝ
砂子はゝ[illegible]十年乃雪
八九百とそれ〳〵うゝまつの風
芦苅さまよ三[illegible]まこの月
[illegible]の[illegible]の[illegible]腮も竹の葉
祇園の鳥帽子も古き秋の花
枝ちるゝ弁之出るを庵連歌
為一とゝ枝乃夕照

[illegible]

[illegible]
[illegible]の心を忘れぬ[illegible]の心ゆ二人寝
[illegible]ゆ[illegible]しゝ内刺ゆ泊瀬
[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
望て六句の偈も[illegible]
[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]一番
小春て[illegible]る伐ゆ乃斧
何人を[illegible]て姿乃[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]
二千里の[illegible]ゝ月の[illegible]
[illegible]速このふゝ秋[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
楠の立葉も見えぬ 諸中
[illegible] 土も合羽乃蔭なる
蔭居なり むこうのわたりの
湯あみの高尾を [illegible]
沙金色の封 紅
[illegible] 絞る袖の
牡丹の富をとけ [illegible] 茶
[illegible] 四 心の瓢 [illegible]
[illegible] 二月 日 [illegible]

物遊
蔭山
る時
物象
蔭山
る時
物遊
蔭山
る時
物象
蔭山
る時

風に冥の数 [illegible]
[illegible] の [illegible] 高 紅
[illegible] 養 の 運 [illegible] 綱
高 [illegible] の 紅 乃 糸
[illegible] 糸 の 百 [illegible]
[illegible] 高 の [illegible]
[illegible] 四 中 [illegible]
[illegible] 海 乃 [illegible]
[illegible] の 高 乃 [illegible]
[illegible] 涙 [illegible] 高 の [illegible]
細引 [illegible] 高 [illegible]

蔭山
仝
物遊
仝
蔭山
る時
物象
仝
蔭山
る時

芥火も吹きて消ぬ冬原　藤心
已この把握に捨てるふるさと　狐遊
うつむく連も白髪よ箭きの　藤心
消ぬ先をこのぐ横ぐ　執革
今宵の法の楽しも花の宴　仝
法義の場よ弱よる多　仝

右當日從巳至酉中刻一巻満尾

馬琴 九一句　藤山 九一句　雪碇 九一句
狐遊 九一句　自得 二句　詩筋 一句
鉄矢 一句　狐筆 十二句

出席四人　雪碇　藤山　狐遊　馬琴

九三丁

親蔵

おもひ出る老のこの世哀れ深し　叔父家子氏　新賀
紅葉はらはらこの世哀れ　外姪聟伊義氏　洛洲
つくづくと昔日繰りて仏壇　姝聟紋太氏　明月

八月十二日墓参

墓参も去年の嬰も秋の雨　馬琴
おもひをうつに
秋の七夕ふる墓を
七夕の秋も世なるも人の日の　仝

舊識

招魂の祝嘉けし　花もち　吉良氏　雪碇

紫の花咲ける仏の堂　蘭丸
芝の草乃嘉ちゃ嘉ちゃ秋しられ　自得
野も山も法の光や嘉ぬ月　孤遊
硬ちゃ〳〵月見ちゃ淋しの夜　芳竹亭

慰問

定香の柳や〳〵筋寒ち厚　三和
寒ちゃ〳〵や去年の葉月もこうなる　旅矣
小車の花もおもけや一廻り　甸〳〵
むちゃ乃ち雲ふむ坊やされ萩　柳変
秋ふちゃ去れぬ戸ゥ扇こうれ　路柳

一とせもはちゃうの平　曽薄
家の世の果うれ　之葛
只夫の心観音ちゃ　山子
去年醒〳〵人の嘆や　遠声
羅も文ちゃ秋乃　箭車
樒〳〵水のけ　湖鳴
光陰の弱年ちゃ　吾吟
風の音乃ちゃ　素月
世ちゃ乃ちゃ惜や　李杏
青葉ちゃ乃新緑を　有芳

[illegible]まるも肩[illegible]まるる木魚[illegible]　九皐
[illegible]の鐘とも[illegible]の義たる[illegible]　東寿
けし[illegible]や法師の[illegible]ん　横田露頂
一色に殊数つ[illegible]ける柿ぶど[illegible]　有隣
碑やさ[illegible]の苔の岩れんけ　吾琴
ちき[illegible]の兄とも[illegible]ばりき　田町 臼琳
月み[illegible]も[illegible]ん[illegible]ひ仲　仙客
仏[illegible]南天の実や[illegible]　戯道
蕃[illegible]子に手[illegible]仏乃[illegible]　長郷
[illegible]の[illegible]ひちき日[illegible]　元玉

[illegible]五丁

那由他阿僧祇大千世界[illegible]錦　俗　木法
[illegible]ちき世[illegible]秋の[illegible]　俚客
車[illegible]子や七[illegible]一[illegible]　[illegible]尺
乙[illegible]や彼[illegible]ている人も[illegible]　驢耳
拗待の[illegible]更[illegible]菓[illegible]　あや 夜光
のと書め水引[illegible]の　三猴
ちき人の反故[illegible]
[illegible]れ[illegible]ふ[illegible]　古懐堂　偶偶子
ちき人の菓[illegible]反故乃[illegible]　空
庶[illegible]や吉年の秋[illegible]乃日記草　竹奴

面白き仏の御誓願の
条居も秋中無くなり秋の風　如水
[illegible]　山焼
秋の雲こうしなるる源の月　紫山

非時別莚

清明瑞乃茶賢なる所なり茶なり　狐遊
清まる雑数少も袖乃下寿　花川
椽端る月の友垣慕ひ　山狼
[illegible]る　傳る素菓焼まる　素夕

[illegible]一巡らせし　巳凌
杜風志人と附るる蟬　雅笑
素麺を箕の跡不明まる　〃
此も涸るの物よりの中　〃
今迄もたてのこなつこの　素夕
場つる志より変るの寿　〃
初夏のけきハ変る活俄の美　山狼
世よも名るる笹の名人　〃
三番目の融る月もこうもきて　巳凌
紫汗茶と志中汲　〃

きりぎすうゝやゆめ　の分の山形　鉄矣
八卦の本も揺ぶらぬ　ゆるぎ　々
横ぶるゆゝ清の庭の花　花川
燈を　ふきぶるもまる　挑　々
ナ
もゝとせに　牡丹　綾ふ　命　食　巴凌
とゝて汁　こゝ　ひゝ　ゆ　猿　物遊
風風　雲　富士を　清　海　々
素敵　ゝ　蓮　あゝ　小粒
ふゝ　分　蓮　つ　清　宗　雅笑
聲ゝ　憂　囲　猫　亀　素夕

九七丁

心ゝ　墨　さゝ　此　童　鉄矣
藤ゝ　ゝ　陽　々
面　ゝ　聲　ゝ　花川
さゝ　ゝ　戒　力　々
名月　ゝ　石　巴凌
秋　情　ゝ　屠　雅笑
ら　薄　ゝ　蕾　橋　小粒
人目　冥　ゝ　嬉　礼　素夕
聖　ゝ　ゝ　物遊
寒　海　ゝ　鉄矣

[illegible]の十二銅　物色
[illegible]の習合の[illegible]　物華

物遊　五句　花川五句　山猿五句
素夕　五句　巳渡五句　雅笑五句
机華　一句

[illegible]居士の小祥を[illegible]
風交の人々[illegible]中旅る　三中菴　完来
[illegible]を
[illegible]月の友
[illegible]月を[illegible]を[illegible]
連枝の[illegible]の句を

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]　蜀黍
[illegible]の折　拂子　山東　京傳

友人曲亭子去年在天倫之戚汎瀾
未乾尺波電謝忽遭小祥之期矧亦
値秋晏哀苧不可銷毀遂裁一詩聊
布親串　京山

雨暗秋窗夜欲典破簾風透惹幽情
遠逢故客夢殘處架琴絶絃響一聲

謁東岡舎墓懐後桃樹

秋かぜや這ふてこの世をさらぬ松　蕉山

員外

此集は[illegible]時遊吾のかくや趣行　佐渡治洲の
ぬしもこの年九月十五日にこのよをさらぬ　六十二才 法名釈
道静居士 此ぬしはことさらこの外姑(ヨバ)をあはれみしと見いとき
なのりし時背髪(アゲマキ)けづりそのまゝこせ給へりしちからに涙
ながらこゝに一句をもとめてついにいとことなりをと
それにつらね侍る

涙くらし野霧の中にその袖しぐれ　馬琴

静嘉堂

高[illegible]は半年雪をふらせ。山の上へ露をはらへ。
此あたりの[illegible]只此秋に[illegible]。それはめれ
のちかごろ。雑文の[illegible]
この仲秋十四日の夜の刻[illegible]
久しく[illegible]雨のふる[illegible]
ちらせける。去年の秋いろその病床[illegible]
のこ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
たゞ黄ばあり。このこゝろをしらぬ世をうらゝ後ハ
[illegible]
[illegible]
三つのうちより。秋爰童世と冥の文字をとゞめ。
も一斤の石を花えんとす。黄ばみたるもの
三たゞりしぐるゝ。ゝこの拾ひあつめ。俳
四世をうらゝ。又人百の寿ゝ。
[illegible]人めの者ゝとゝもを秋の終　[illegible]

寛政十己未年十月十三日絶毫　曲亭主人書

三十丁終

供養序

拾。居士。去年今月今日。萩の上風の
吹ゆえす。露草の夢と成ぬ。魂も
彼岸の浄土へ帰り給ひぬ。家ゝ
年々家草乃。業ハ八千代の影
も空しく。夢ノ楚の草の夢ゝ
て。葛ハ裏見の恨ても。甲斐
なき昔ゝ。たゞ者類。
新ゝ旋覆花の一色ゝハ。矢筈

草乃走るゝ事しく。烏草孫
生ひしゆゑ。壁生草ゝ袖濡
すらん。去れども今年今日。
貫房馬子。隙を浄土に旧知を
集め。反魂草の法莚を開て。北の
勅霊を迎へ奉んとなり。
吁。居士。世ゝいきとゝ時を。
もちゝ簾草乃仏風を慕ひく。
藤を負脱る時を。終に半日の閑を

倫く。朝顔の華に半すきを観し。
枯梗の色のさびるを恨に。花鳥
ゝ。月雪ゝ。情を動し思ひを
知るめ。苔の細道の細に伝ひ。
萩乃露の危き恨をたゝれし
も。今ハ世を忍草の。永き形見
となるなり。いてや。水撫草
の一事ゝ。観音菩薩の引接を
迎て。浄土白蓮の俳諧に拙ひ

玉〳〵と秋乃千種の露の硯石。
たゝき千尚草とハ奇しなり。

風月庵　雪破識